

京鹿子

創刊 第一號 四月一日發行
定價 一八圓 每月一圓 一冊發行

4月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その九十一



猫の子の奪ふシヤネルの紙袋
 猫の子の瞳には馴染まぬ獣偏
 風神の継ぎ接ぎぶくろ冴返る
 登音に小さき恥じらひ雪割草
 霞みゐる脇本陣の手抜かりに
 鳥帰る背負ふ悲愁の剣ひとつ

春陰のはぐれ小鳩といけず石
 囀りに季ときの花びらおく窓辺
 一本の鍵の重さよ別れ雪

吟行・東山七条界隈

三寒の血天を睨む白象図
 春日の千の本尊ゆるぎなし
 春光に息づく化仏たをやかに
 春陰や太閤塀に時とき間の翳
 陶工の形なりの美学や春館

近詠

名誉顧問

和田 照海



木呪

一山の引き締まりたる木呪
杣人も加はり里の木呪
成木責加勢と言へる里帰り
峰里の空晴れわたる成木貨
成木責終へ女らの無礼講

近詠

名誉顧問

塩貝 朱千



七草粥

初詣ブラックスーツの大柏手
書初や桜花と大書して卒寿
七草粥吹きつ聞きある進化論
初カヌー湖の機嫌を風に聴く
ワルツ舞ふやうに解けて室の薔薇

神麓集

近詠

福主宰

村田あを衣



初夜空

あした発つ娘へ一心マフラー編む
煮凝の透きぬ帰心の只中に
煮凝のとけて始まる夢語り
星ひとつふたつ枯木の黙ほぐす
三日月は星を受けとめ初夜空

初花 沼田巴字

うららかや猫宙返りして落ちぬ
のんびりと富士と遊べり奴胤
乗つ込み鯉手で掴むには大きすぎ
やはらかき揺籃なれや雪柳
初花や八十余年の苦難越え

花菜風 北川孝子

頬杖はうれひのかたち夕花菜
往く雲の影も道づれ花菜咲く
たまゆらの灯のほつほつと花菜風
想ひ今あの世この世の花菜咲く
花菜風雲の流離の果てしなく

今朝の春 植村蘇星

生かされて生きて自問の寒の明
累代の戒め確と今朝の春
すべからく二兎追ふなかれ今朝の春
祖のありてこそその存在今朝の春
ホ句ありてこそその生活や青き踏む

冬銀河 直江裕子

衰への美学いささか冬銀河
崩れゆく自負のもろさや霜柱
咲ききれぬままの小さき冬薔薇
洗ひたてのひとりの皿にある淑気
海境の波たちあがる野水仙

鳩 高木晶子

誰か知る今豪雪のクリスマス
目薬を貰ひこれにて年収め
二抱へある門松を主都と為す
羽子板は振れぬ大きき店の奥
凧の糸切れて真白な鳩となる

仮泊 奥田筆子

人日や仮泊のやうに杜の月
久方や空中分解ひばりかな
冬かもめ冬の漂流物であり
言ひたきこと喉に止めて冬の百合
恋猫のどちらも見えて塀の上

風まかせ 伊藤希眸

白梅の花弁一ひら俗の世に
年の暮絶体といふ生活^{たつき}なし
枯草の地球の素顔踏み歩く
薄氷の暈浮くごと湖流れ
冬ばらの腕刺す力風まかせ

初蝶 井上菜摘子

初蝶のひかりと見えて過りけり
感性をみかくミモザの透くるまで
教科書のなかの戦争草霞む
黄泉平坂お花見をして引き返す
桜蕊ふる何かの鍵が抽斗に

神麓集

神麓集

雪嶺 山中志津子

分身は迷子のやうな小春蝶
熱爛や若さの驕りありし日も
雪嶺を遠見に旅の折り返し
廃屋を抱き殺しつつ山ねむる
凧揚げて自分さがしの旅続く

安堵のかたち 鷺山珀眉

八百万の神を称へて実万両
去年今年貫く無病息災裡
薄ら日の人待つところ笹子鳴く
円満は安堵のかたち福寿草
人参を三日喰みたる舌足らず

春の雪 井尻妙子

寝返りて背骨のきしみ春の雪
雪ふた夜意識障害なる二夜
白梅にふれ日常には触れず
春愁解く真空パック解くやうに
人が好きあふみが好きで残る鴨

数へ日 亀井福恵

数へ日の手順省略ままならず
今といふ色を尽せり寒牡丹
山眠る近くて遠きわが生地
咲き残るもの咲き急ぐものに霧
沖へ船沖からも船年惜しむ

七種粥 西村 白杼

一願の今日百日目寒まうで
殿さまもその日暮しも七種粥
元日や山に敬礼トランペット
新年があるから人生やりなほせる
くカーブ今満開の冬ざくら

空の黙 安田 優歌

寒の空いちまい乗せて始発バス
寒昂十七文字を鎮ばめて
白鳥やペンが翼になる刹那
一椀に郷の景なる七種粥
寒林に杭打つひびき空の黙

芽木の風 菊池 和子

せせらぎのリズム耳より春立ちぬ
葦鴨の近寄りがたき水の距離
影もたぬ風の翅音や春は来ぬ
芽木の風享けて神馬の天翔る
正月の暮るる早さも常の景

左利き 本郷 公子

俳系の歴史讀ふる実南天
風を編む寒林雲を遊ばせて
餅花の影は幼き日の不安
浮寝鳥風の自在に影深む
具沢山の粕汁よそふ左利き

神麓集

寒 椿 石原 孝人

数へ日や日暮へ急ぐ水の音
着ぶくれの奥より覗く本音かな
黄昏のひかり集めて石路の花
竹林の闇を濡らして寒椿
風花の遅速の中を帰りけり

春の闇 山田 和

魚鼓を打つこだま吸ひ込む春の闇
露の芽や十五に早き変声期
梅散るや仏足石の万葉歌
松園の筆の穂細し牡丹雪
鴟尾ひかる香りを解く露の臺

雪うさぎ 佐藤 千恵

磐座へ続く足跡雪うさぎ
若水や神の柄杓の青々と
千両万両しだいに淡き人の縁
松過ぎやバターチキンカレー赤し
連弾の佳境に入りぬ細雪



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

水琴集

吹田 吉田 孝江

どれ程の悔しさ山茶花の紅涙
夜咄へ手燭のゆるみ敷松葉
蕪千枚古樽に住む祖の鬪魂

誤報には片耳を折る月兎
赤き実の二粒で足る雪兎

高槻 杉井真由美

年用意以下省略のまた増えて
中継車息白き背を追ひかける
胸奥に詩ひとつ置く年の夜

乗車ドア手袋で押す山陰線
熱爛や男の蘊蓄果てもなく

西宮 山本 正

扁舟は右へ左へ去年今年
年の瀬やゼブラゾーンをはみ出せり
年の暮流言飛語を掃き清む
振り出しの助走の構へ冬木の芽
実万両唯足るを知る尉と姥

枚方 木下 晴美

何着め冬溜めてゐる試着室
決断のあとの葛藤ぬくめ酒
手袋の遺品となりし七年過ぐ
二人居て一人のごとく熱爛酌む
手袋のそれぞれの色街を行く

福知山 橋本 光乃

葉ぼたんやひとりよがりの渦を解く
城光ゲの四角三角御慶のぶ
福ふくと京の白味噌年明るる
歌留多取り姫の恋路もはね飛ばす

京都 高橋 榮子

一片の雲寄せつけず月冴ゆる
散りもみぢ踏まれくだかれ土に帰す
侘助の一輪挿しや骨董屋
早々と蓄のふむむ梅古木
守ること多き花街柵挿す
風に乗り母の言伝て雪螢
冬たんぼぼ母の廻せし糸車
悲しみを落葉に重ねたどる径
借景の眠る比叡や寒の寺
防人の歌冬浪の千々に散る

大西 逸子

アソチ 伊吹 之博

春小袖御点前の娘の笑み湛ふ
花梨成る段ボールには「ご自由に」
初めての息子のカレー冬温し
子の作るけんちゃん汁や午後独り
一葉落つ無口の人の誉め言葉

京都 富崎 静代

世の義士の地球を睨む討入りの日
永へて九十年の初日出
七日粥嬰と祖父母と大土鍋
蕩蕩と生きて老いるや寒の鯉
凧揚げの少年空をつかみをり

英華採集

世の義士の地球を睨む討入の日

京都 富崎静代

主君の仇を討つために吉良上野介の邸へと赤穂浪士四十七士が討ち入った話は、今でも語り継がれていて見事本懐を遂げた赤穂浪士たちに当時の江戸庶民は、賛辞の歓声を上げ喜んでいた。掲句は、世の中の多くの人達を義士に喩えて荒れて病んでいる地球を何とか出来ないものかと訴えている。何故、人と人が傷つけ合わなければならぬのか？人間の内に潜むエゴと鬼をどうして取り除くことが出来ないのか？と季語が問いかけている。

何着め冬溜めてゐる試着室

枚方 木下晴美

服を新調する時は、殆どの人が身体に合わせるために試着するだろう。掲句は、色、デザイン、ブランド名などあれこれと迷っていることが「何着め」に表れていて、試着室には一着ごとに片づけられずに重ねられているのである。何着も重ねられた服を見て冬が溜まっていると見た作者の脳裏には、まだまだ続く寒さの中をこの冬服のどれを着て街を歩くのかと自分の姿が過つたのではないか。中七の「冬溜めてゐる」の措辞が巧み。

葉ぼたんやひとりよがりの渦を解く

福知山 橋本光乃

葉牡丹は、正月用の床飾りや門松の立った玄関脇などに置かれ主には鑑賞用の植物として重宝されているが、牡丹にどこか似ていることでその名の由来がある。牡丹の花が、高貴美貌の代名詞として使われているように葉牡丹もその自負を持っていても不思議はなく掲句の「ひとりよがり」も合点がゆく。句を取合せと取れば作者自身の「ひとりよがり」の性格を季語と重ねることによって反省の上での下五「渦を解く」に結びつく。